

ブロンテ書簡研究(4)

英語教室 岩 上 はる子

(八) 1841年

1841年、シャーロットは25歳になろうとしていた。前年には、シジウィック家での初めてのガヴァネス体験も失敗に終わり、作家になる望みをかけてH・コールリッジに送った原稿も、期待したような結果をもたらさなかった。友人エレンの結婚話が進む中で、シャーロットは彼女の人生における重要な転機を迎えていた。

シジウィック家での苦い体験からようやく立ち直ったシャーロットは、1841年3月、ブラッドフォードから9マイルほどのロウドンにあるアッパーウッド・ハウスのホワイト家のガヴァネスになった。年俵は手取りで16ポンドほどで、ロビンソン家のガヴァネスをしていたアンの給料の半分にも満たなかったが、それでも「明るく朗らかな人々に囲まれて…暖かな心に触れること」(1841年3月3日?付け)を期待して、シャーロットは同家に赴いた。だが「ガヴァネスの仕事が自分には向いていない」(同書簡および、1841年8月7日付)ことを感じるシャーロットは、ホワイト家の人たちが「親切で良い人たちである」(1841年5月9日付け、ヘンリ・ナッシー宛)ことを認めながらも、「もっと余所に良いところがあれば、アッパーウッドを出たい」(1841年5月4日?付け)とエレンに打ち明けている。

現状に対するシャーロットの不満はホワイト家への不満というよりも、自分自身の生き方への不満であるように思われる。1840年の暮れに父親を失った、もうひとりの友人メアリ・テイラーは、ニュージーランドへの移住を決意していた。シャーロットはエミリに宛て、次のように書き送っている。「メアリはガヴァネスにも、学校の先生にも、お針子にも、帽子作りにも、家政婦にもなれないし、なるつもりもないと決心したのです。イギリスではやりたいことが見つからないから、イギリスを出るというわけです(1841年4月2日?)。」そうした決心が「理にかなったものか、狂気の沙汰かは、わかりません」(同)としながらも、シャーロットには伝統的な女性の生き方にとらわれない行動的な友がまぶしく映ったにちがいない。

ブロンテ家でも変化があった。アンは1840年8月にはヨーク近在のソープ・グリーン家のロビンソン家のガヴァネスになり、プランウエルも同じ頃、リーズ・マンチェスター鉄道のサワビー・ブリッジの駅員になり、さらに1841年4月1日からはラデンデンフットの駅長に昇格していた。しかし休暇はさまざまで、姉妹がいっせいに顔を会わせることは難しかった。「ちりぢりばらばらな」(1841年5月9日付け)生活を送らずに済むことは全員の願いであったが、それには自分たちの学校を設立することが最善策であった。その夢の実現に向けて、7月、伯母が資金の提供を申し出た。さらに

は旧師ウラー先生から、彼女の学校を引き継いでという親切なる申し出があり、学校開設はいっきよに進展するかに見えた。

だがシャーロットは自分たちの学校経営よりも、さらに大きな夢を育んでいた。ブリュッセルへの留学である。それに火を点けたのは、現地から届いたメアリの手紙であった。文化の香り溢れる大都市の雰囲気伝えるメアリの文面に刺激されたシャーロットは「内なる何かを見つめ、知り、学びたいという、かくも切なる渇き。一瞬それらが強く湧きおこるのを感じました。わたしは自分の持てる力を発揮していないのではないかと、という激しい焦燥に駆られ、そして絶望感に襲われました(1841年8月7日)」とエレンに書き送っている。この新しい夢の実現に向けたシャーロットの行動力には、眼をみはるものがある。1841年9月29日付けの伯母に宛てた手紙は、有能なビジネスマン顔負けの雄弁さで、伯母が学校開設に提供した資金を留学費用に充てることを説得している。シャーロットはすでに現地で学んでいるメアリを通じて情報を収集し、ブリュッセル在住の牧師ジェンキンス師に依頼して適切な学校探しにとりかかった。「約束の地」ブリュッセルへエミリを同行することを、シャーロットはほとんど一方的に決めている。1841年は、新しい出発の胎動のうちに暮れた。

[1841年1月3日]

[ハワース]

前回のお便りで氏のことを伺いましたが、特に驚きはしませんでした。テイラーさんご本人¹⁾も、そしてたぶんご家族の方々もほっとされたことと思います。死の悲しみは1年前に、ご病気が致命的なものにならざるをえないと初めてわかったときに過ぎました。これまではただらだらとつづく不安の中でしたが、今はそれも終わりました。現在はたしかに悲しくはあっても、以前の不安よりはましでしょう。亡くなられた後がどうなるかは別問題です。思うに、ご一家はすぐには言わないまでも1、2年のうちに離ればなれになるでしょう。もうしばらくは彼らを結束させておくだけの理由があるでしょうが、じっとしてられない行動的な人たちですから、ずっと抑えておくというわけにはいかないでしょう。メアリひとりでも、バーストールとゴマソールの教区を合わせた中から選んだ男性10人より、元気もあれば能力も備えています。彼女のような性格の人をありきたりな囲いのなかに入れておこうとしてもむだで——そんなのは跳び越えてしまうことでしょう——メアリはきっと自分の目標を立てるだろうと思います。他の兄弟姉妹たちも同様でしょう。

どうやらヴァインセント氏²⁾——わたしは馬鹿ではないかと思うのですが——のことでは、わたしが何か卑劣な取引に関わっているとお疑いのようなのですが、アーンリー³⁾で調理された料理もデヴィデス⁴⁾でかき混ぜられたお粥にも、わたしはなんの関係もありません。このことについてわたしが言ったことは、あなたにしか伝えておりません。お恥づかしいのですが、ヘンリの手紙に返事さえ出していません⁵⁾。

訂正した方がよいかも知れませんが、このことについてちょっとほめかした人がひとりいますが、だからといって裏切ったという良心の呵責は感じません。メアリ・テイラーのことですが、彼女にはわたしの秘密——少なくともそのほとんど——を話します——人間はだれしもひとつやふたつ、頭蓋骨のなかにしっかりとしまっておく方がよいと思うようなことはありますが。ですからわたしは、あなたのもいくつか彼女に打ち明けても公平で忠実だと思います。少なくともそのうちのいくつかは、話したからといってあなたの感情や利益を損なうものではないと確信します。

ヘンリはヴァインセント氏が変わり者であるといっていました、どういう意味なのでしょう？

変わり者にはふたつの弁明しかありません。並外れた才能か、能の小さなひび割れかですが、ヴィンセント氏の愛人ぶりは、これらのいずれの結果なのでしょう。ネルや、彼をよく観察しなさい。もし彼がおおむね立派な人ならば、細かいことに目くじらを立ててはいけません。でもそうでなかったら、あなたのお得意の頑固者になりなさい。

この手紙は文法もひどいし、つづりもめっちゃめっちゃです。でもお許しくださいませ。

C ブロンテ

エレン ヘレン エレノア ヘレナ

ネル ネリ——ヴィンセント夫人

いい響きですか、ネル？わたしはそう思います——あなたが結婚したら、わたしは決して会いにいかないでしょう。

- 1) Joshua Taylor のこと。1840年12月28日に死亡した。
- 2) 1840年11月20日付けエレン宛の手紙を参照。
- 3) Earnly にはエレンの兄ヘンリがいて、この結婚話を進めていた。
- 4) ヘンリの教区チチェスター近くの小村。
- 5) 1840年11月20日付けエレン宛の手紙には、ヘンリから手紙をもらったことが告げられている。

ヘンリ・ナッシー宛1841年1月11日

[ハワース]

拝啓

先日のお便りにお返事をさし上げるころだと思います。さもなければ、前回のようにぐずぐずしないという約束を果たせなくなってしまうから。ヴィンセント氏の件について小耳にはさんだということは申し上げたと思いますが、彼がブルックロイドを訪問してから最近の発表までの間にずいぶん時間が過ぎましたので、なにか障害があって前進できないのかと思った次第です。そうではないと伺って、正直なところ喜んでいました。というのもエレンが立派な結婚をすると聞くことほど、わたしにとって喜ばしいことはありませんから。でも立派なというこの副詞が重要な条件なのです——それはたくさんを意味しています——性格、気質、趣味の一致および豊かな資産です。あなたのご説明では、ヴィンセント氏はこれらすべてを保証してくれるように思えますが、一つだけ好ましくないように思えた言葉——変わり者とおっしゃいました——があります。その奇矯さが下品な、あるいは愚かしい性格のものでなければ——頭脳の弱さに由来するものでなければ——それを理由にエレンが本気で反対するのは、正しいとは言えないでしょう。でも馬鹿げた取るに足らない形で現れる奇矯さの例が、嗤うべきその所有者をしばしば露にすることがあります——これは必然的に、夫に対する妻の尊敬の念を弱めることになりますから、大きな欠点となるでしょう。わたしはこうしたことについての限られた知識の許すかぎり、エレンに対して強く助言いたしました——ヴィンセント氏がはっきりと求婚したばあいには、それを受けるようにと——この助言の結果、彼女はわたしが「アーンリーで調理された料理¹⁾」に手を貸したと疑ったようです。わたしにはわけが分からず理解できませんから、彼女の言葉をそのまま使います——わたしがそんな卑怯なことやおせっかいなまねはしていないことを、あなたに証していただけるで

しょう。この件についてわたしが言ってきたことはもっぱら彼女に対してで、それは簡単には次のようなことになります。「もしヴィンセント氏が善良で、立派で、尊敬できる人なら、たとえ今は彼に対して強い愛を感じなくても、彼を受け入れなさい——フランス人たちのいう‘灼熱の恋’²⁾など、あなたの物静かな性格には合いません——ですからそんな感情が生まれるのを待つなんてことのないように。ヴィンセント氏が良識があり温厚な方ならば、あなたはまもなく非常に幸せで落ちついた彼の妻となるものと信じて疑いません。」

こうした言葉から、わたしが誤った謙遜の信奉者ではないことがおわかりでしょう³⁾。あなたはそれが若い女性たちに「イエス」と言うべきときに「ノー」と言わせると、ご不満でした——でもわたしがエレンのことを分かっているとすれば、彼女はそういう女性たちのひとりではありません——ですからあまり急かしてはなりません——友人たちに意見や助言をさせ、後は彼女の正しい判断と理性にまかせるのがよいでしょう——わたしたちには、彼女が結婚するのが良いように思えます——しかし彼女がそう考えなかったら、たぶん彼女がいちばんの審判なのでしょう——結婚しないことで多くの悪を逃れている例をたくさん知っていますし、最近では非常に多くの若い女性が衰えを知らない熱心さであの虹の影を追い求めています——わきによけて、それが色の着いた蒸気に過ぎず、近寄って見ればその色は褪せてしまうと、はっきり言う例外的なひとりを立派と言おうではありませんか。

あなたが送って下さると言った詩が届けば嬉しいのですが——代わりにわたしにもお返しをくれるようにとのこと——そんなお願いに応えられる力が、どうしてわたしにあるとお考えなのでしょう。なるほどわたしはかつてはたいへん詩的でした、16, 17, 18歳頃のことです⁴⁾——でも今では24歳で、じきに25歳になろうとしています——この間の年月は人生からその余分な色合いを奪い去り始めた時間です。この年では想像力は摘み取られ刈り込まれ——判断力が培われるべき時です——ごく若い頃の数え切れないほどの幻想の、少なくともいくつかは、片づけられなくてはなりません⁵⁾。もう長いこと詩は作っておりません。

退屈で道徳的で単調なこのお便りをお許し下さるでしょう——今後ともお健やかであられますようお祈り申し上げます。

1) 1841年1月3日付けエレン宛の手紙を参照。

2) 1840年11月20日付けエレン宛の手紙を参照。

3) 同上

4) シャーロットは詩の創作を実際よりも昔のこととしている。1833年から37年くらい、つまり17歳から21歳頃までは盛んに詩を作り、38年にも13篇、39年にも4篇の詩がある。詩を離れるようになったのは、サウジーの書簡(1837年3月12日付け)をもらった頃と符号する。

5) サウジーに手紙を書いた頃は詩人として名を成すことを考えていたシャーロットだが、1850年9月26日付けギヤスケル夫人への手紙では、自分の若書きの詩を妹たちのものと比べて劣るものとしている。

[1841年3月3日?]

[ロンドン、アッパーウッド・ハウス]

愛するエレン

仕事を探そうと思っていることは、しばらく前にお知らせしました。あの時は堅く決意していました。たとえ何度失望させられようと、努力をやめるつもりはありませんでした。歯牙にもかけら

れないことも2, 3回ありました——さんざん手紙を書いたり面接を受けたりして——ようやく成功し、新しい勤め口に着いたところです。ロンドンにあるアッパーウッド・ハウスのホワイト家¹⁾です。

大邸宅というわけではありませんが、住まいはとても快適できちんとしていますし、広々とした美しい庭があります。この職場を選ぶにあたっては、給料の点ではかなり目をつぶりました。それも住み心地を考えてのことです。心地が良いというのは、なにも美味しいものを食べたり飲んだり、暖かい部屋や柔らかなベッドということではありません。明るく朗らかな人々に囲まれて、つまり鉛の鉱床から掘り出されたのでも、大理石の石切り場から切り出されたのでもない暖かな心に触れることです。報酬は年20ポンドが相場ですが、わたしの場合16ポンドにもなりません²⁾。洗濯代が差し引かれますから。生徒はふたりで、8歳と6歳になる女の子と男の子です。雇い主については、こちらに来たのが昨日だと言え、どういう人たちが、あまり説明を期待しないでしょ。一目で人の性格を云々する眼力は、わたしにはありません。はっきりしたことを言う前に、まずいろいろな状況の下で、またいろいろな角度から、じっくりと見極める必要があります。ですから言えることはただ、ご夫妻とも良い人たちらしいということだけです。思いやりがいかかか礼儀知らずなどと批判する理由は、今のところ見あたりません。生徒たちはわがままで躰がよいとは言いかねますが、性格は素直そうです。次回にお便りするときには、もっとお話しできるとよいのですが。彼らの期待に応えることを、わたしの希望と目標にしましょう。満足してもらっていると感ぜられ、かつ健康でいられさえすれば、わたしもそれなりに幸せだと思えるでしょう。それでもガヴァネスという仕事がわたしにとってどんなに辛いものであるかは、他人に分かるはずがありません——なぜならわたしの気質も性格も、この仕事にどんなに向いていないかは、私にしか分からないのですから。責めは自分にあることを忘れていたり、それを克服するために最善を尽くしていないなんて思わないでください。あなたにはどんなに些細なことに思われても、わたしにとってはこの上なく難しいことであつたりするのです。子どもたちが馴れ馴れしくまとわりついてくるのを、はねつけることはできません。またどんなに必要なことでも、主人や召使いたちに頼むことができないのです。どんなに都合が悪くても、断るくらいなら我慢する方が楽なくらいです。なんてばかなと思えます。自分でもどうにもならないのです!

ガヴァネスの分際で友人を招くなんて不届きと思われるでしょうか。あなたは どう思いますか、教えてください。もちろん泊まるわけではなく、1, 2時間いっしょに過ごすだけなのですが。雇い主をないがしろにしているというのでなければ、何とかお顔を見せられる方法を教えてください。でもそう言いながらも、わたしはとんでもないお願いをしているのではないかという気もします。でもロ [ウドン] はブ [ラッドフォード] からほんの9マイルなのです。

わたしたちのハンサムな友であるハワースの牧師さま³⁾から、今年のパレンタインが届いたことでしょう。わたしも出発する数日前にいただきましたが、その扱いは昨年より心得たものです。かの君の手練手管は、先刻より承知です。こちらが知り抜いていることは、本人もわかっています。このところ彼がどんなに大人しくちゃんとしていたか、ちょっと想像もつかないでしょう。彼を責めなくてごめんなさい——でも私にはそうするつもりはまるでありません。彼にはとても好意もっています。おおらかで飾らない性格、温厚な人柄に敬服しています——あらゆる愛の手管、仕掛け、実のないふるまいにもかかわらず、あの方に匹敵する男性はこの20マイル四方には見あたりません。30歳以下の女性に会えばきまって、あなたに首ったけなどと平気で口説いたりします。書きたいことはまだまだあるのに、時間がありません。愛しいエレン、すぐにお返事ください。必

ずね。さようなら。

- 1) ブラッドフォードの商人 John White。羊毛取引きで財を成した伯父 Willam Leavens から Uperwoodhouse を相続した。
- 2) この給与はアンがロビンソン家からもらっていた額の半分に過ぎない。
- 3) William Weightman (1814-42) ブロンテ師の2人目の牧師補。39年7月末にハワースに赴任した。

[1841年3月21日?]

[ロンドン、アッパーウッド・ハウス]

愛するエレン

あなたからのほんとに嬉しいお便りに対して、とても短いお返事しか上げられないことをお許しただかなければなりません。というのもわたしの時間はすっかり埋まってしまっているのです——ホワイ夫人はわたしにたっぷり縫いものを期待しています——昼間は子どもたちがいるので——じつに手が掛かります——「たくさん」は縫えません。ですからこの仕事には、夜を充てなければならぬというわけです。あなたの不安が何によるものであるにせよ、気が滅入って幸福な気分でないことはわかります。マーシーのひどいふるまいについて、あなたはそれ以上の説明をしてくれません。ネル、元気を出して。長い手紙をもっとわたしに書きなさい。おたがいにとってそれが良いと思います。ここはストーンガップよりはましですが、愛着をもつには仕事が多すぎることは神のみがご存知です。あなたの言葉で少し元気が出てきました。いつもあなたの助言のように行動できたらと思います。ホームシックにひどく悩まされています。ホワイ氏のことは大好きですが、ホワイ夫人については今は何も言わずにおきましょう。彼女を好きになろうと懸命に努めています。子どもたちはシジウィック家の子どものたちのような悪魔の化身ではありません。でもときに甘やかされ過ぎで、ときに手を焼くことがあります。ぜひ、ぜひ、ぜひ、会いに来てください。たとえ礼儀に反するとしても、ほんの一時間でもいいから立ち寄ってください。来てください。あなたを見捨てたなんて、もう言わないで。わたしの愛するエレン、わたしにはそんなことをする余裕はありません。このつまらない世の中で、どこかに同情と愛情を見いだすことなしに——実際それはめったに見つからないのですが——いったん手に入れたら、気まぐれに投げ捨ててしまうには、あまりに大きな宝物です——やっついていくなんでわたしの性格ではありません。

あなたの可愛い腕飾りをどう着けたらよいのかわかりません。いらしたときに、その謎を説明していただきます。

大切なヴァレンタインを同封します——大切にしてください——手紙の主の青い眼、赤褐色の髪、バラ色の頬を思い出してください。この関心があなたに向けられたものとお考えになってください。だれにも合うようにという彼の意図は明らかですから。

ごきげんよう、ネル。C ブロンテ

[1841年4月1日?]

[アッパーウッド・ハウス]

愛するエレン

今は真夜中の12時です。けれど床につく前に、どうしても伝えなければならないことがあります。わたしがご招待を断るだろうとお考えなら、あるいはそう思いながら招待状を送ってくださったのなら——それは間違いというものです。あの素気ないお便りを読むなり——直ちに勇気を奮い起こし——その足でホワイト夫人の前に進み出て——用件を切り出したのです。2分ほどお返事がありませんでした。こんなに尽くしているのに、お許しくださらないおつもりかしら？わたしはいぶかりました。そう、わかりました。夫人は——しぶしぶ冷やかな声で——ゆっくり言葉を切りながらいました。ありがとうございます、奥さま、とわたしは嬉しさを隠しもお礼を述べ、部屋を去ろうとしました。そのとき奥さまが呼び止められ、おっしゃったのです。「そうね、では土曜の午後、子供たちがお休みのときにお出かけなさい——そうして月曜の朝にはいつもどおり、お勉強ができるようにしてくださいな。それならばあまり不都合はないでしょう。」トルコ人も顔負けだわ、わたしは心の中で思いました。とにかく、かしこまりましたと答えて、話合いは成立したのです。

ですから翌々週の土曜日——いいこと次の土曜ではありませんよ——が、約束の日ということになります。馬車の手配をして下さるとのこと、それがあなたのお考えなのか——仮にジョージが承諾してくれたとしても——それも、わたしの知るある乙女にねだられて否応なく承諾したのではないか、気がかりです。けれど「くるま」(車輪のついた乗物は何でも、ウラー先生はこうお呼びでした)を回してしまったら、お兄さんが不便でお困りではないか、などと気を回したりはしません。一生に一度、目をつぶってお言葉に甘えることにします。行きます。どんなにありがたく心楽しいか、神のみがご存知です。苦役からの一日の解放を喜んでいきます。くるまを回していただければ、歩いてでも参ります。

ねえ、いいかしら、ネル。わたしがバーストールにおじゃまするのはメアリ・テイラーにニューホランド¹⁾やニュージーランド行きを思い留まらせるためではありませんよ²⁾。その件については、言うべきことはすべて伝えてあります。何といっても決めるのは本人なのですから。わたしが楽しみたいのは自由であり、懐かしい2、3の友人たちの顔を見て、思いの丈を語り合うことなのです。

神の祝福を——またお会いしたいです。翌々週の土曜の午後には万歳！W夫人と悪戯っ子たちにさようなら。おやすみなさい、わたしの可愛いひと！

C・ブロンテ

ウエイトマンさんのバレンタインでパイプの火をつけてみましたか。

- 1) オーストラリアは、オランダ人たちがその開拓地を北部に拡大した1644年からこの名称で呼ばれていた。公式にオーストラリアと呼ばれるようになったのは1817年からである。
- 2) 1830年代から40年代にはニュージーランドへの移住が盛んに行われた。1838年に設立されたニュージーランド会社の役員の一ひとりSir William Molesworth (1810-55)は、リーズ選出の国會議員であった。

エミリ・J・ブロンテ宛 [1841年4月2日?]

アッパーウッド・ハウス [ロウドン]

拝啓E・J

先日のお便り、いつもながら嬉しく読みました。一言お礼を言わなければなりません、手紙に同封されていたもの、あれはまずかったです。送ってくれない方がよかったです。昨日アンから便りがあり、元気とのこと¹⁾。本当ならよいのですが、2、3日前にアンとブランウェルに手紙を書きました。ブランウェルからの返事はまだです。別の駅への異動が良い結果を生んでくれるとよいのですが²⁾。あなたのいうとおり、とにかくなんとかなるでしょう。

バーストールまでエレン・ナッシーに会いに行くため休暇を一日ももらいたいと、勇気を出してホワイト夫人に頼んでみました。エレンが馬車を迎えに寄こすといってくれました。願いは聞き届けられましたが、いかにもしぶしぶで冷淡な感じでした。けれどこちらは堂々とやってのけました。来週の土曜日に出かけたいと思います。ゴマソールでは奇妙な雲行きです。メアリ・テイラーが弟のウェアリングと思切った決心をしたのです³⁾。はじめは途方もないことのように聞こえましたが、あの特殊な状況を思うと、もっともな気もしてきました。二人は移住するつもりなのです——この国を捨てて。行く先は変更のない限りニュージーランド北島のポート・ニコルソンの予定です!!! メアリはガヴァネスにも、学校の先生にも、お針子にも、帽子作りにも、家政婦にもなれないし、なるつもりもないと決心したのです。イギリスではやりたいことが見つからないから、イギリスを出るというわけです。ニュージーランド行きという風変りで雲をつかむような計画を決めてしまう前に、まずフランスにでも行って一年ほど過ごしてみないかと勧めたのですが、決心は変わらないようです。この件に関してメアリや兄弟たちがどんな風に考えているのか、またポート・ニコルソンに関してどの程度の情報をもっているのか、よくは知りませんが、はたしてこれが理にかなった計画といえるのか、狂気の沙汰というべきなのか、わたしにはわかりません。お父さま、伯母さま、タビーによろしく——さようなら。

C・B

追伸

わたしはたいへん元気です。あなたも気をつけて。すぐにお便りください。

- 1) アンは1839年12月にインガム家のガヴァネスを辞めていたが、40年8月にはロビンソン家のガヴァネスに雇われていた。
- 2) ブランウェルは1840年8月にリーズ・マンチェスター鉄道のサワビー・ブリッジの駅員に採用されていたが、1841年4月に新設されたラデンデンフット駅長に昇格になった。年俵はそれまでの倍近い130ポンドで、ハウースの牧師ウェイトマンの年俵100ポンドに比べて高額だった。だがずさんな経理の責任を問われて、1842年3月に解雇された。
- 3) William Waring Taylor は1841年11月にニュージーランドのウェリントンに向けて出発した。メアリは1845年に移住することになる。

[1841年5月4日?]

[ロンドン、アッパーウッド・ハウス]

愛するエレン

ずいぶんご無沙汰してしまいました。でも、こちらではどんなに時間がままならないかをご存知でしょうから、お許しいただけるものと思います。

ジョージお兄さんがお話しなさったでしょうが、こちらに帰り着いた際にご挨拶に伺いませんでした。すると失礼なということで、W夫人はわたしにひどく腹を立てました。紳士が門をくぐりながらそのまま引き返したと聞くと、彼女は怒りで顔を真っ赤にしていました。夫人は外聞をひどく気にする方なのです。W氏も不満に思われたようで、といっても彼の場合はもてなしたかったのという、もっと親切な気持ちからです。もしあなたがわたしに会いに来たら、大騒ぎされること請けあいです。

この3週間あまり、家中で「大掃除」なる忌まわしい作業が行なわれています。ありがたいことに今はおおかた済んで——その間じゅう、わたしは家政婦兼ガヴァネスという一人二役を演じるはめになり、子守は料理人兼召使いに变身させられました。ところでこの子守というのが、稀に見る美人で、身じまいするとご主人よりよほどレディらしく見えるのです。夫人が収税人の娘であったというのも頷ける話です——それからご主人の育ちもけっしてよいとは思えません——それでいて夫人ときたら、自分や夫の家族や親戚のことをさも偉そうに話し、滑稽なくらいです。そして商人のことを「あきんど」などと呼んで、ひどく高慢に見下した態度をとります。騒々しくて自慢やで——文法は間違えるし、つづりはでたらめ——だけれど、それでも夫人は良い人の部類に入るだろうと思いはじめていたところでした。でも彼女のちょっとした性格を思い知らされて、距離をおくようになりました。それまでずっと対等に親しげに扱っていたながら——少しでも気に入らないことがあると、女性とは思えないような荒々しい態度で怒鳴りつけるのです。公正に言えば、落度はけっして彼女の言うところにはないのにです。激情というのは、人間の卑しさと上品さをはかるには格好の試金石になると思います。夫人は思い通りにならないと、恐ろしく攻撃的になります。もう一度こんなことがあったら、給料を精算してもらって出ていきます。

この季節、こちらはことのほか美しいです——お庭はうっとりするばかりで、なにかかもエメラルド色に輝いています——お見せしたいようです。夫人はさぞかし得意になって案内してまわることでしょう。W氏は父にぜひ来訪し一週間ほど滞在するよう、熱心な手紙を書いているようです¹⁾。でもわたしは来て欲しくありません。そんなことをしては借りがふえるだけで、かえってありがた迷惑というものです。もっと余所によいところがあれば、アッパーウッドを出たいと秘かに考えているのですから。最近ではどうにか子どもたちの扱いにも馴れ、おかげでだいぶ楽になりました。また丸まるした赤ちゃんの世話をしていたら、どうやらわたしのことがわかるらしく、なついています。その子を可愛く思っている自分ときおり気づかされますが、その気持ちも、母親が赤ん坊を取りあげて笑わせたりすると、途端に消え失せてしまいます。わたしの眼には可愛いばら色をした赤ん坊と映っていたのが、たちまち甘やかされた手のかかるちびすけへと変貌してしまいます。他の子供たちについても同様です。

「仕事に就く」ということで張り切っているようですね。とても続かないと思います——でも経験はよいことです——どんなことでもやってみることは、必ずためになるものですから。

どんな方法でも構いません、どうか会いに来てください。会いたいです。マーサ・テイラーは本当に行ってしまったようです²⁾——明らかに。

さようなら、わたしの愛しいお嬢さん。

それではまた。

C・ブロンテ

- 1) ブロンテ師は1812年に、この地にあった Woodhouse Grove School を訪れたことがあり、そこで将来の妻 Maria Branwell と出会った。
- 2) マーサはブリュッセルにあるケーケルベルクに入学した。同校は社交界にデビューする若い女性たちの教育機関で、フランス語、ドイツ語、音楽、絵画、ダンス、体操などを教えていた。

リー・ソファイア・ブルック宛¹⁾? 日付なし [1841年初頭?]

ミス・メアリ²⁾はまだ仕事を続けていますか? 元気で幸せに暮らしていますか?

もっと長いお便りをしたいところですが——だいぶ夜も更けて——眠くなりました。お母さまにくれぐれもよろしくお伝えください。妹さんたちにもよろしく。

かしこ

C ブロンテ

- 1) Leah Sophia Brooke ウラー塾での同級生。
- 2) Anna Maria Brooke リーの妹。父の死後、姉と共に教師になった。

ヘンリ・ナッシー牧師宛 [1841年] 5月9日

ロウドン, アッパーウッド・ハウス

拝啓

日曜の夕べのひと時を、あなたへのお返事にあてようと思います。たぶん正しいこととは言っていないだけではないでしょう。でもわたしには間違ったことをしているとは思えません。自由になる時間といえば、せいぜい日曜のこの時間くらいしかないのです。こうした時を友達とのおしゃべりに費やしても、それを責める人はありません——ですから、友に手紙を書くことに使ってなんの不都合がございましょう。

わたしの係りの騒がしいおちびさんたちが寢床におさまったのを、いま見届けてきたところです。学習室にはわたしだけで、窓から見える庭には日曜日の静かなたそがれが訪れようとしています。お手紙の借りがございました。お返しするのに今ほど格好の時があるのでしょうか。さて、ナッシーさん、噂話もニュースもご期待には及びません。お知らせするようなことは何もないのです——仮にあっても、今はそれをお話する気分ではありません。脈絡のない文面をお許しください。あなたのことを気むずかしい移り気な方と思ったなら、文通はご遠慮申しあげていたことでしょう。ほんとうに思えば不思議なことですね。個人的にはほとんど存じ上げないあなたに、不躰にも気の

向くままに座り込んで手紙を書きつづるなんて。でもじっさい形式ばった文面は苦手です。書くのなら、思うがままに書くしかありません。わたしがまたガヴァネスになったことは、エレンがお伝えしたようです。お言葉のとおり、家を離れる、とりわけ居心地のよい——裕福でもないし、立派でもありませんが——家を離れるについては、生身の人間として辛いものがあります。質素で平凡な我が家でも、わたしにとってはこの世で何にも替えがたいものなのです。同じ鋳型から作りだされ、同じ空想のるつぼで育てられた——子どもころから互いに寄り添い、いがみ合うこともなく過ごしてきた——兄弟や姉妹たちだけが感じる深く強い愛がそこにはあるのです。

今わたしたちはみんな散り散りになり、他家で糧を得ております。妹のアンはヨーク近在に、弟はハリファックス近くで、それぞれの仕事についており、そして私はここにおります。エミリのみが家に残りました。本人の希望でもあり、またその有能さゆえに家にはなくてはならない存在です。こうした状況の下で不平をいえますか。とてもそんな立場にありません。わたしたちは互いへの思いやりだけを糧として、あらゆる苦難に耐えようとしております。もし頼りとすべき神さまが、わたしどもに健康と勇気をお与えくださり、辛い任務をまっとうし、いかなる誘惑に対しても一寸も譲らないようお守りくださるなら、わたしは神に深く感謝し満足いたすことでございましょう。

いつも心満たされている、などという振りをするつもりはありません。ガヴァネスというものは、往々にして悲嘆させられるものなのです。雇い主のホワイト夫妻は概して親切で善い人たちなのですが、子供たちは甘やかされています。ときに困難に直面しますが、それを克服するにはたぶん耐えるしかないでしょう。わたしが来てからこどもたちの学力が向上したことに、ご両親がとても満足なさっていると知って、嬉しい気持ちがいきました。それにしても自分の関心や気持ちばかり書きつらねました。たしかに私にとっては面白いことでも、それがあなたにとってもそうだとすることはありえません。ですからこのページを読みとばしてくれよう願います。書かなければよかったと悔やんでおりますので。

2週間前にエレンから手紙がきて、一日だけでもブルックロイドに来て欲しいとのことでした。仕事から離れ、もういちど「懐かしい顔々¹⁾」に囲まれたいという気持ちを抑えきれず、遠慮をかなぐりすて、ホワイト夫人に許可を求めました。承諾をとりつけ、わたしは出かけ、とても素晴らしい休日を過ごしました。お母さま、お姉さま方、セーシー、エレン、それに可愛そうなサラ、それからリチャードとジョージにも会いました。皆さまお元気です。エレンはぜひともどこかに仕事を見つけたいと言っていました。わたしはあまり賛成できず、むしろしばらくアーンリーに行っただろうかと勧めました。彼女には変化が必要なのです。それにあなたも妹さんが2、3カ月でも滞在するのは歓迎でしょう。

この近所にバレットという名前の家族がいるかどうか調べてみました——けれどもそうした方は聞きません——読み方が非常に似ているバリックという夫妻はおられますが。

時間になりました。ごきげんよう。妹さんのミス・ナッシー²⁾によるしくお伝えください。

粗々かしこ

C・ブロンテ

1) Charles Lamb, 'The Old Familiar Faces' より。

2) Ann Nussey アーンリーで兄の世話をしていた。

〔1841年6月10日?〕

〔ロウドン、アッパーウッド・ハウス〕

愛するネル

何か1行でも書き送らなくては、前回お会いしたときに言ったにもかかわらず、わたしがあなたのことをなおざりにしていると思い始めることでしょうか。短い手紙を走り書きするほんの15分さえままならないと言っても、あなたにはほとんど信じられないでしょう。でも手紙を書いたら、それを出しに行くのに1マイルあって、それには1時間近くかかります。それは1日のなかではかなりの時間なのです。ホワイト夫妻がお出かけになって1週間になります。今朝、お便りがあり、現在、ヘクサムにいらっしゃるそうです。お帰りの日時は決まっていません。でもあまり遅くならないことを願っています。そうでなければ、この休暇にアンに会うチャンスがなくなってしまうでしょう。妹は先週の水曜日に帰宅したはずですが、休暇は3週間しかないのです。というのも彼女が務めている家族がスカーバラに行くからなのです。あの娘の健康状態をわたし自身が判断するために、ぜひとも彼女に会いたいと思います。他の人の報告など信用できません。だれも十分に細かく観察しているようには思えないのです。あなたにもぜひ彼女に会っていただきたいのですが。

これまでのところ、召使たちとも子どもたちともとてもうまくいっています。でも退屈で寂しい仕事です。友達がいない寂しさは、あなたもわたしと同じくらいおわかりでしょう。メアリ・テイラーにアイルランドの分¹⁾を提供したのですが、彼女はそれを受け入れられる状況にはありません。お兄さんたち——たとえばジョージなど——は、自分たちの妹が「仕事に出る」という考えに反発するプライドの持ち主なのです。それがそんなに品位の下がることとは、最近になって初めて知りました。

あなたのご訪問はわたしにはとても慰めになりました。M.T.も来られたらと思いますが、どうやって彼女に会う時間を見つけたらよいか、わたしにはわかりません。

さようなら、神の祝福を。

C ブロンテ

1) ガヴァネスの仕事。雇い主の氏名は不明。

〔1841年7月1日〕

〔ハワース〕

愛するエレン

お手紙をいただいたときは、わたしは家にはいませんでした。でも今は帰宅しています。まるで天国です。

昨夜、帰り着きました。ホワイト夫妻は先週の日曜の晩にお帰りになったばかりで——わたしが休暇を願い出たところ、W夫人は1週間か10日ぐらいならと言いました——が、わたしは3週間を要求し、あなたに勝るとも劣らない粘り強さで頑張りました。要求は通ったものの、こんな勝ち方は好きではありません。

もうひとつ叶ったことがあります。来週の火曜日にこちらに来て、できるだけ滞在されるよう、一同からのお願いです。直接わたしにお返事ください。ご都合は、そしてキースリーまで迎えに出た方がよいかどうか、お知らせください。伯母は上機嫌です。このまま続けばよいのですが。もう長いお便りをする必要はありませんね。

さようなら、愛するエレン

C B.

7月1日

アンに会う機会を逸してしまいました。彼女は「エジプト人の地、囚われの家¹⁾」へ戻りました。それから小さな黒猫トムが死にました。杯はすべていかに甘くとも、そこには苦い滴が入っているものなのです。

あの紳士が誰なのか見当もつかないでしょう。でも気にしないで。いらしたら教えてあげますから。キーパー²⁾は元気です——大きくて、相変わらずむっつりしています——嬉しくて書けません。来てください。

1) 旧訳聖書「出エジプト記」14章13節。ソープ・グリーンンのロビンソン家のこと。

2) Keeper エミリの飼い犬の名前。

[1841年7月3日?]

[ハワース]

愛するエレン

忘れてました。火曜日に来てと言いましたが、バーストールからブラッドフォードまでは、木曜日しか馬車がないのです。それに、伯母がクロス・ストーンのフェネル伯父さん¹⁾——とても具合が悪いのです——を見舞いに行くと言っています。伯母は来週の木曜日に行くことに決め——たぶん1、2週間泊まってくるでしょう。伯母の部屋が空きますから、その方が、あなたにもわたしたちの小部屋に押し込まれるよりずっと快適でしょう。ですから、エレン、木曜日に来ていただけたら嬉しいのですが。あなたをお迎えできるのは、エミリにもわたしにもほんとうに楽しみです。お出でいただけなかったら、とてもがっかりすることでしょう。

かしこ

C B

お返事ください

1) フェネル牧師の最初の妻はブランウェル伯母の伯母。シャーロットたちには大伯父になる。

[1841年7月19日]

[ハワース]

愛するエレン

お出でくださるはずの木曜日、わたしたちは期待を胸に長いこと待ち続けました。望遠鏡を手に、ときには鼻眼がねをのせて窓の向こうに眼を凝らし、すっかり目が痛くなりました。でもあなたが悪いのではありません。アーンリーにいらしたのは当然のことをしたまでです。わたしたちが耐えなければならなかった失望ですが、それも人生にはつきもので、さまざまときに会おうものです。それでもお話ししたいと思っていたことの多くが忘れられ、ふたたび口にされることはないでしょう。わが家ではいま、ひとつの計画があたためられているところです。それについてエミリもわたしも、ぜひあなたに相談したかったのです。それはまだ卵といったところで、殻から顔をのぞかせてもいません。はたして毛の生えそろうた雛に孵るものやら、腐って鳴き声をあげることもなく死んでしまうものやら。それは未来の神託を待つしかありません。こうした謎めいた比喻に惑わされないで——ごくありふれた日常のことを話しているのですから——もっともデルポイ神殿の神託¹⁾のように——情報を卵や雛などの比喻で包みこんではいますが。

要点を申し上げます。お父さまと伯母さまが、わたしたち——つまりエミリとアンとわたしのこと——が学校を始める計画！²⁾について時おり話しあっています。そうしたことを私がどんなに望んできたかは、これまでしばしば言いましたね。でもそんな事業の資金をどこから調達するかは、まるで思いつかなかったのです。なるほど伯母さまがお金を持っている³⁾ことは知っていますが、こうした計画に融資することなど、まずありえないと思っていたのです。ところが申し入れがあったのです。というか、もし生徒を集められ——それなりに経営が成り立てば——出資してもよいと言ってくださったのです。

これはかなり有望に聞こえます——それでも計画に対して暗い影を投げかける問題がいくつかあって、それを考えなければなりません——こうした冒険に対して、伯母はおそらく150ポンド以上は出さないだろうと思うのです。それだけの金額でいちおうの体裁を整えた（派手でなくともよい）学校を設立し、維持運営ができるものでしょうか。お姉さまのアンに尋ねてみてください。彼女に答えられないと思ったら、このことは黙っててください。借入れをすることについては、目下のところ足並みがそろいません。しっかりした基盤が確保できれば、はじめはどんなにささやかで慎ましいものであっても構わないのです。

学校を開設する場所をあれこれ考えているうちに、パーリントン——もしくはその近辺——が思い浮かびました。あそこにはミス・ジャクソンの学校⁴⁾の他にあったかどうか覚えていますが？もちろんこれはほんの思いつきに過ぎません——あそこが不適切だという理由なら山ほどあります——知人なし、縁故なし、おまけに家から遠いなど。けれどもイースト・ライディングなら、ウェスト・ライディングほど混雑してないように思うのです⁵⁾——どんな計画でも事前に十分な調査をすることはもちろん大切です——けれど計画が何であれ、実行しないうちに時間だけが過ぎてしまうことを恐れます。あなたもわたしたちの計画に加わるように事態は動くか？この質問には今は答える術はありません。

わたしたちの愛する友ウィリアム・ウェイトマン牧師の名前を出さないで、この手紙を終わらすことはできません。——彼は相変わらずハンサムで、愉快で、陽気で、ご機嫌で、おおらかで、

くたくなく、移り気で、牧師らしくありません。アグネス・ウォールトン⁶⁾と文通を続けています。去年の春にはアップルビー⁷⁾に出かけ、一月ほど滞在しました。その間に父に4、5回手紙を書いてきましたが、それによれば——わたしも読んだのですが——彼はミス・ウォールトンと結婚するつもりようです。もし彼女がハンサムな顔で——陽気で率直な人柄と、培われた才能とで勝ち取れるものなら——もし彼女がこうしたもので満足し、そのうえ感じやすい人間の誇り高さや繊細さといったものを要求することがなければ——そういうことなら、彼はきつとうまくいくでしょう。

なるべく早くにお便り下さい。ロウドン宛でけっこうです——将来についてもっとはっきりした見通しがつくまでは、現在の務め先を去るつもりはありません。さようなら、愛するエレン。

C B

- 1) ギリシャのパルナッソス山にあるデルポイ神殿のアポロの神託。
- 2) ブロンテたちは1845年に学校を開いたが、生徒はひとりも集まらなかった。
- 3) 父親の死後1808年以来、エリザベス・ブランウェルと妹たちは年間50ポンドの遺産をもらっていた。
- 4) Miss Clarissa Jackson の経営するブリドリントン (バーリントン) のキーにある 'Prospect Place' に開設されていた学校のこと。
- 5) イースト・ライディングはウェスト・ライディングほど人口過密ではなかったが、それでもブリドリントンには15校があり、そのうち3校は女学校で、いずれもキーにあった。
- 6) Agnes Walton 1840年4月7日付けエレン宛の手紙を参照。
- 7) Appleby はウェストモールランドに流れるエデン川のほとりの美しい市。ウェイトマンの出身地。

エミリ・J・ブロンテ, 1841年7月30日付け日記¹⁾

万事順調で、
アンが25歳になるか、
もしくはわたしの次の誕生日の翌日に
開封されるべき文書。

1841年7月30日, エミリ・ジェイン・ブロンテ

金曜、夜——9時頃——雨降りの荒れ模様。台所にひとりで座っている——わたしたちの文机を整理し終えたばかりで——この文書を書いている。お父さまは居間だ。伯母さまは2階の自分の部屋で、お父さまに『ブラックウッズ・マガジン』を読んであげている。ヴィクトリアとアデレイド²⁾は泥炭小屋にもぐって、キーパー³⁾は台所にいる。ネロ⁴⁾は籠のなかだ。わたしたちはみな健康で元気だ。シャーロット、ブランウェル、アンもまた変わらないことを願う。シャーロットはロウドンのアップパーウッドのジョン・ホワイト氏のところで、ブランウェルはラデンデン・フットで、アンはスカーバラで——たぶんこれと同じ文書を書いていることだろう。現在、わたしたちの学校を設立する計画が討議されている。目下のところなにも決まっていないが、それがうまく行き、わたしたちの大いなる期待に答えてくれるものと確信する。4年後の今日、わたしたちはまだ今のままぐずぐずしているか、満足のゆくようになっているかは、時が教えてくれるだろう。

この文書の冒頭に示された時間には、わたしたち、つまりシャーロット、アン、そしてわたしはみな楽しそうに自分たちの居間に座って、学校も繁盛して、夏休みで集まっていることだろう。借金も払い終わって、かなりの金額を現金で手にしているだろう。お父さま、伯母さま、そしてブランウェルは、わたしたちを訪問している、あるいはこれから訪問するところだ。今日のような陰鬱な空もようとはうって変わって、よく晴れた暖かい夏の夕べになるだろう。アンとわたしはたぶんちょっと庭に抜け出して、わたしたちの文書をじっくりと読み返すことだろう。こんな具合に、あるいはもっと素晴らしいことになってくれたらと願う。

現在、ゴンドル人たち⁹⁾は陰悪な状態にあるが、今のところまだ表だった争いは起こっていない。王室の王子や王女たちは全員がインストラクション宮殿にいる。手元にたくさんの本があるが、例によってどれもわずかしか進んでいない。けれども新しい文書を作ったところだ。偉大なことをするのに、賢人には一言で足りるというものだ——そして今、わたしは流刑になり苦しめられているアンに対して、彼女がここにいてくれたらと思いつつ、遠くから勇気づけの言葉を贈って締めくくる。

- 1) 1841年と1845年に書かれた日記が残存している。エミリとアンは4年おきに記録を書き留めることにし、エミリの誕生日にそれを開封することになっていた。
- 2) あひるの名前。女王と伯母の名前をとったもの。
- 3) 既出、1841年7月1日付け。
- 4) 飼い慣らした鷹の名前。
- 5) エミリとアンの初期の物語および詩の舞台であるアフリカの架空王国ゴンドルの住人。

アン・ブロンテ、1841年7月30日付け日記

今日はエミリの誕生日。彼女は23年を完了し、今は家にいると思う。シャーロットはホワイト氏の家でガヴァネスをしている。ブランウェルはラデンデン・フットで駅員をしている。そしてわたしはロビンソン家でガヴァネスをしている。わたしはこの勤め先が好きでないで、別の所に変わりたいと思う。生徒たちは寝室に行ったので、わたしも行く前にこれを終わらせたい。

わたしたちは自分たちの学校を設立することを考えているが、それについてはっきりしたことはまだ何も決まっていない。できるものやらどうやら、わからない。できたらよいと思う。4年後の今日、わたしたちの状況はどうなっているだろうか。その頃、何事もなければ、わたしは25歳と6カ月になり、エミリは27歳になっているだろう。そしてシャーロットは29歳3カ月だ。わたしたちは今ばらばらで、うんざりするほど何週間も会えそうにない。でもわたしたちのだれも病気の者はなく、みんなエミリ以外は生活のために働いている。エミリもわたしたちと同じように忙しく、実際にはわたしたちと同じように衣食の費用を稼いでいる。

われわれは自分が何者かを、なんと知らずにいることか
ましてはわれわれが将来どうなるかなど、さらに知らない¹⁾

4年前、わたしは学校に行っていた。それ以来ブレイク・ホールのガヴァネスになり、辞めて、ソープ・グリーンに来た。海を見、ヨークの大聖堂を見た。エミリはミス・パチュットの学校²⁾の教師になり、辞めた。シャーロットはミス・ウラーの塾を辞め、シジウィック夫人の家でガヴァネスになり、それを辞めてホワイト夫人の家に行った。ブランウェルは絵画を諦め、カンバーランドで家庭教師になったが辞めて、駅員になった。タビーが辞めて、代わりにマーサ・ブラウンが来た。わたしたちはキーパーを飼い、可愛い小さな猫を飼ったが、いなくなり、それから鷹も飼った。ガチョウを飼ったが飛び去り、野良猫を3匹飼ひ慣らしたが、そのうち1匹が死んだ。こうしたさまざまなことは、その他のことも加えて、1837年7月には思い描きもしていなかったことだ。次の4年は何をもたらししてくれるだろうか。天のみが知るところだ。だがわたしたち自身は、あのときからほとんど変わっていない。わたしはあの頃ののままの欠点を持ち、ただもう少し知恵と経験を身に着けただけだ。そしてあの頃より少し自分を抑えるようになった。わたしたちがこの文書とエミリが書いたものを開くときは、どうなっているだろう。ゴンドル人たちはまだ栄えているだろうか。そして彼らの状況はどうなっているだろうか。わたしは今、「ソララ・ヴァーノンの生涯」³⁾の第4巻を書いている。

しばらくのあいだ、わたしは25歳を自分の人生のひとつの節目と見なしていた。それは本当に予感となるかも知れないし、あるいはただの迷信がかった空想というに過ぎないかもしれない。後者の可能性が高いが、時が教えてくれるだろう。

アン・ブロンテ

- 1) バイロンの『ドン・ジュアン』およびシェイクスピア『ハムレット』中のオフィーリアの言葉の影響がある。
- 2) ハリファックス近在のロー・ヒルにあったElizabeth Patchetの学校。
- 3) 'Solala Vernon's Life' については不明。ただ1840年1月1日付けの詩 'Maiden, thou wert thoughtless once' には 'Olivia Vernon' の名前がある。

1841年8月7日

アッパーウッド・ハウス

愛する愛するエレン

今は土曜日の夜——子供たちを寝かしつけ、ようやく腰を降ろしてあなたの手紙に返事を書くところなんです。またもやわたしひとりきりで——家政婦とガヴァネスの二役です——というのもホワイト夫妻は、タッドカスター近在のブルック・ホールのダンカム夫人という方を訪問中なのです——実は留守のあいだ私はひとりですが——それが何にもまして嬉しい時間なのです——こどもたちも今ではどうやらお行儀もよくなり、召使いたちもあれこれ気を配ってくれるようになりました。考え方も感じ方もわたしにはどうにも理解しがたい、そしておそらく相手もやはり（もしわたしが隠すことなくいえばの話ですが）私のことを理解できないでしょうが、そんな主人夫妻の前で、いつもにこやかに愛想よく打ち解けたふりをしているのは、なかなか容易なことではありません。おふたりがいなくて、それをしないで済むのが有難いです。

どうやらマーサ・テイラーは大いに楽しんでいるようです——メアリも同じらしく——お兄さまのジョンと直ちに大陸に帰ろうとしている¹⁾と聞けば、あなたもびっくりするでしょう——

でもあちらに滞在するというのではなく、一月ほど旅行したり遊んだりということのようですが——そうした段取りをわたしは喜んでいますが——マーサがそこまで姉より好かれるというのはありえないと思いますので——メアリから長い手紙と小包をもらいました。ブリュッセルで買ったという、それは素敵な黒い絹のスカートと、それからとても綺麗なキッドの手袋が入っていました。もちろんその贈り物は、ある意味でとても嬉しかったです——こんなに遠く離れ——ヨーロッパ最高の都市の興奮に包まれながらも——わたしのことを思いやってくれたのですから——でも、その一方では贈り物を手にして、戸惑いも感じました——メアリもマーサもお金は必要なだけしかもっていないはずなのです。こんなに高価な物でなくとも、気持ちだけで十分でしたのに。

メアリの便りには、彼女が目にした絵画や聖堂のことが書かれていました。比類なき名画や壮麗な聖堂の数々——手紙を読みながら、何かしら喉にこみ上げてくるものがありました。じっと己を律し、たゆまず創作に励む。翼への——豊かさが与え得る翼に対する——かくも強い憧れ。内なる何かを見つめ、知り、学びたいという、かくも切なる渇き。一瞬それらが力強く湧きあがるのを感じました。わたしは自分の持てる力を発揮していないのでは、という激しい焦燥にかられ、そして絶望感に襲われました。

愛するネル——こんな告白ができるのはあなたにだけです。そのあなたに対しても「口頭」でより、手紙で書きつづりたいと思います。こんな抑えきれない愚かしい思いも、ほんの一時のことで、5分もすればおさまります。それがふたたび頭をもたげることのないよう祈ります。なぜならそれは大きな苦痛を伴うからです。お話しした計画については、なんの進展も見られません——おそらく当面はなんの動きもないでしょう——けれどエミリもアンもわたしも、それを胸に描いています。わたしたちにとってそれは北極星であり、どんなに絶望的な状況のなかにあっても、わたしたちはそれを仰ぎ見ているのです。こんな書き方をして、わたしが沈んでいるのではないかと思われるかもしれませんが、決してそんなことはありません——それどころか、ここはガヴァネスの仕事口としては、良い部類に入るものと承知しています。ただときおりわたしを気落ちさせ、つきまとして離れないのは、自分は生来この職業に向いていないのではないか、という疑問なのです。教えるだけでよいのなら、それは造作もないことです。けれども苦痛なのは、他人の家に住み——自分がほんとうの自分でなくなる——冷やかで表情に乏しく感情のない人間を装わなければならないことなのです。

あなたがヘンリとサセックスにいらしたことは、やはりよかったと思っています——たしかに私たちの落胆は大きかったですが、それも今では和らぎました——あなたに変化があったのはよいことです。わたしたちの学校計画については、当面どなたにも話さないでください。実際に始められてもいない計画など、雲をつかむようなものです。愛するネル、どうぞお便りをたくさん下さい——それがどんなに貴重なものか、おわかりのはずです。お兄さま、そしてお姉さまによるしく。

あなたの愛する子より（そうお呼びになりたければ）

C・B

健康状態は良好です——胸のつかえは一つありますが（言わないつもりでしたのに、そうもいえないようです）。アンのことです。あの娘は多くを——わたしよりはるかに多くのことを——じっと耐えているのです。アンのことを思うと——人からはいつも辛抱強い、虐げられた異邦人のように見られ——あなたの想像を絶するような、おそろしく横暴で高慢で横暴な人々のなかに

おかれ——わたしには彼女の内に秘めた感じやすさがわかるのです。心傷ついたとき、そばにいてわずかでも慰めの言葉をかけてやれたら。あの娘はわたし以上に孤独な境遇です——わたしのようによだちをつくることができません——この話はやめにいたしましょう。

- 1) メアリはマーサと共にブリュッセルのケーケルベルクで学ぶことになる。兄 John Taylor は後にニュージーランドに移住するが、この頃は弟ジョウゼフと Hunsworth Cottage に住み、仕事でイギリスと大陸とを行き来していた。

エリザベス・ブランウェル宛1841年9月29日

ロンドン、アッパーウッド・ハウス

拝啓、伯母上さま

お申し入れ¹⁾をお受けする主旨の手紙をウラー先生に書きましたが、その後、先生からは音沙汰がありません。こんなに長いこと連絡がないのは、思いがけない障害から話が壊れたのではないかと、ほかに理由は見あたりません。ところでホワイト夫妻や他の方々にも相談し、賛成していただいたことなのですが、ある計画について伯母さまにもお知らせ致したいと思います。友人たちは先々のことを考えるなら、学校を始めるのはもう半年ほど遅らせて、その間はどんなことをしても大陸の学校で勉強するべきではないかということです。イギリスは学校の数も多く競争も厳しいことから、なにか他に優れた点をもたなければ、きっと激しい競争にもまれ、けっきょくは失敗するのではないかと、という意見なのです。そして伯母さまがご親切に申し出てくださいました100ポンドについては、ウラー先生が備品などを融通してくださることになりましたので、当座は手をつけずに済むのではと申します。そしてせっかくのお金が生きることを望むなら、少なくともその半額を、申し上げたような留学の費用に充ててはどうか、そうすれば利子も元金も早く確実に返せるようになるのではとっています。

わたしはフランスへ、つまりパリへ行こうというわけではありません。ベルギーのブリュッセルを考えています。旅費は多く見積もっても5ポンドくらいでしょう。生活費はイギリスの半分もかかりません。それでいて教育機関はヨーロッパの他のどこにもひけをとりません。半年もあればフランス語はかなりなものになるでしょう。イタリア語も上達しますし、ドイツ語もかじれるものと思います。ただし今のような健康状態がつづけばということですが。現在ブリュッセルにはマーサ・テイラーがいて、現地の第一級の学校に通っています。彼女のいるシャトー・ド・ケーケルベルグのような所は考えてもいません。とても手が届きませんから。でも彼女に手紙を書けば、イギリス人領事ジェンキンスさまの奥さまに相談して、とにかく安くてきちんとした住いと、しっかりした保証人を見つけてくださるはずで。マーサとはときおり会うようにして、街のことを教えてもらいます。さらに彼女のいとこたちを通じて、たぶんこれまでお目にかかったこともないような洗練された教養豊かな人たちとも知り合いになれるでしょう。

こうしたことは実際に学校をはじめようというとき、なにかと有利に働くと思うのです——もしエミリがたとえ半年でもいっしょに過ごせたら、今のわたしたちにはどうもい得られそうもない基盤を築けます。アンについては将来わたしたちの学校が成功した暁に、機会を与えたいと思っています。この手紙を書きながら、わたしの申し上げていることの妥当性を、伯母さまには必ずご理解

解いただけるものと信じて疑いません。伯母さまは常日頃、お金は有効につかうものだと仰せです。つまらない買物はなされない方です。そしてここぞと定めた時には、思いきりよくお使いになられます。50ポンドであれ100ポンドであれ、こうした用途に充てられたお金は、必ずや活かすことでしょう。こんなお願いをできるのは、この世の中でおばさま以外にないことは言うまでもありません。もしわたしたちにお金を融通していただけますなら、それはわたしたちの人生を決定するものであることはまちがいありません。たぶんお父さまはこれを無謀な野心的な企てとおっしゃることでしょう。けれども野心を持たずして世の中に出た人などいるのでしょうか。お父さまもケンブリッジ大学に入ろうとアイルランドを後にしたとき、きっと今のわたしとおなじように野心に燃えていたのではないのでしょうか²⁾。わたしは皆に前進してほしいのです。わたしたちには才能があります。そしてわたしはその才能を生かしたいのです。伯母さま、わたしたちを助けてください。否とはおっしゃらないものと思います。お聞き届けいただけるなら、わたしは決して伯母さまのご好意を無にするようなことはいたしません。皆に愛をこめて。無事を祈ります——わたしを信じてください、親愛なる伯母さま、あなたの愛する姪より。C・ブロンテ
ミス・ブランウェル。

- 1) マーガレット・ウラーは、デューズベリ・ムアのヘルズ・ハウスに学校を移転し、経営を妹エライザに譲っていたが、1841年初頭に閉校していたので、シャーロットに引き継ぐことを申し入れたのである。
- 2) バトリック・ブロンテは1802年10月、25歳の時にケンブリッジのセント・ジョンズ・カレッジに特待免費生として入学した。

1841年10月17日

[ロウドン、アッパーウッド・ハウス]

拝啓、ネル

手紙を書くのにちょっと怠慢だったりすると、いつもわたしを責めるなんて、あなたは残酷だわ——わたしにはスミッシー・レーンのミス・ウォーカーやメアリ・ミルズ夫人のように時間がたっぷりあるわけではないということを、あなたには理解してもらえないことがわかりました。わざとあなたを無視しているのではなくて、できなかつたのです。いじめっ子の不実なおちびさん。

わたしの今の機嫌は言葉にならないくらい悪いです——おそろしくスパイスの効いた、何とも形容しがたいとんでもない夕食を食べさせられたばかりで、世間全体に対して腹を立てているところです。

で、あなたはお家に帰るのですね。ではわたしに長い手紙を期待しないでちょうだい。ほんのおそまつな短い手紙だけです。

わたしはデューズベリ・ムアには行かないつもりです——少なくとも現在わかるかぎりでは——ウラー先生のお申し出は思いやり溢れる親切なもので、私の見る先生のささやかな欠点のすべてというか、ほとんどを帳消しにするものでしたが、それでもデューズベリ・ムアはわたしには苦い場所なのです¹⁾——それにわたしはどこか他の所に行きたくてたまらないのです——ネル、わたしはどうやらブリュッセルに行けそうなの——これはまだ不確かなことなので、話題にしたり人に伝えたりしてはいけない事と思ってください。これはメアリ・テイラーが助言してくれたのです

が、わたしはわくわくしてたまりません。
もう書けません。すぐに送らなくては。

1) 1838年にここで教えていたシャーロットは激しい鬱状態に陥り、学校を去ることになった。

[1841年11月2日]

[アッパーウッド・ハウス]

拝啓ENさま!

まず仕事の話を決ませ、それから個人的な問題について犬と猿のようにけんかしましょう。ホワイト夫人はガヴァネスの経験者から、すでに5件も申し込みを受け——うちひとりと契約間近かのようにです。ですからあなたのお知り合いのご夫人を推薦しても、望みは薄いように思います——多少なりとも可能性が見えたなら、力になれたのですが。

では、けんかをはじめましょう——まずわたしは攻め手と守り手のどちらに立って作戦を始めるか決めなくては——やはり守り手でしょうね——わたしがあまりに水くさいので傷ついたとのこと、まったくその通りです。ウラー先生の提案について、わたしからでなく他の人たちから先に聞いたわけですから。これは事実です——わたしは自分の将来を左右する重要な計画をあこれ立てながら、この問題についてはまったく手紙をやりとりしませんでした——そのとおりです——こんなに長い付き合いの、いつも一緒であった友——身近な愛する友に対して、これはいかにも他人行儀と映ることでしょう——おっしゃるとおりです——こうした行動に対して申し開きするつもりはありません。申し開きなどという、なにか非を認めているような印象を与えますが、わたしはまちがっていたとは思いません。ほんとうのところ、自分の運命について、あの時も、そして今もあいかわらず確信が持てないのです——相矛盾する計画や提案に翻弄されています——わたしの時間は——しばしば申し上げているように、すっかり埋まっているのに——何と少しでも書かなければならない手紙が何通もあるのです——そんな折に、わたしが戸惑い思い悩み——こうなったらよい、あんなになったら困るなどと思い巡らし——叶いそうにもないことを一心に願っている——などと、あなたに書き送ったところで何の役に立つでしょうか。あの慌ただしさのなかであなたのことを思いながら決めたことは、見通しがついて目標が定まったら、その時すべてを知らせようというものでした。エレン、できることなら、わたしはいつもただ黙々と働き、その努力の結果をもって語りたいと思っています。ウラー先生はご親切にもデューズベリ・ムアに来て、妹さんが閉鎖してしまった学校を再開してみる気はないかといって下さいました。まかないをしてもらう代わりに、備品はそのまま使ってよいとのこと——はじめはその申し入れをありがたくお受けして、成功するよう最大の努力をしたいとお答えしました。けれどわたしの胸には消しがたい炎が点されていたのです。わたしは学問をおさめ、今以上のわたしになりたいと切望しました——この前のお便りのいずれかで少し——ほんのわずかですが——そんな気持ちを滲ませていたと思います。その火にメアリ・テイラーが油を注いだのです——わたしは励まされ、彼女の力強いことばに勇気を奮い起こしました——ブリュッセルに行きたい——でもどうやって? 少なくとも妹のどちらかを、わたしとともにその恩恵にあずからせたい。エミリに白刃の矢をたてました¹⁾——あの子はそれくらいのほうびをもらってもよいはず——これをどうやって、やり

遂げたものか？興奮し震えながら家に手紙を書き送りました——伯母さまに助力を請い、お許しを得たのです。まだなにも決ってはいません。けれど半年間、行ける機会を得たというだけで大満足です。

デューズベリ・ムアの件はとりやめですが、たぶんその方がよいのではないかしら。あそこは陰気でばつとしません——学校には不向きです——正直、この計画が潰れたことをあまり惜しいとは思っていません。将来の計画ですが、ブリュッセルに行けば、それだけで精いっぱいでしょう——健康の許すかぎり、あらゆる機会を最大限に活かしたいと思います。そして半年たったら、その時わたしにできることをするだけです。

エレン、わたしがどうしてヴィンセント氏のことに触れたがらないか、その理由がわかるというのですね。わたしにわかるのはただひとつ、前回のお便りはひどく急いでいたので、書くはずのことをかなり書きもらしてしまっただけのことです。ヴィンセント氏がはっきり求婚されたことを喜んでいますが——彼が善良な賢明な方なら、わたしにはあなたが断わったことに対してなんといったらよいのかわかりません——なぜなら愛しているからというより、愛するために結婚する方がよいと考えるからなのです。でもとにかく自分の気持ちをいちばんよく知っているのは自分なのですから、やはり自分で決めるのが一番かと思います。前便で怒ったふりをしたのを真に受けられたのではと心配しています——もしそうなら、今後は冗談にも気をつけなければ。いったいいつになったら会えるのかしら。愛するエレン、どうかわたしを信じてください。陽が射したかと思うとたちまち陰る気まぐれな4月に生まれたわたしですが、けっして移り気なんかではありません。気分の起伏が激しく、賑やかに話していたかと思うとむっつりと黙り込んでしまう——けれどあなたへの思いはいつも変わりません——雲や通り雨を気にせず、大目に見ていただけるものなら——陽はいつもその奥に、たとえ姿は見えなくともそこにあるのだということを、お忘れにならないで。すべて許す、と書いてください。泣き出したような気分です。

C・B

1) エミリは1839年3月から家にいたが、1842年2月にシャーロットとブリュッセルに留学することになる。

エミリ・J・ブロンテ宛1841年11月7日？

ロウドン、アッパーウッド・ハウス

拝啓E・J

この手紙がわたしたちふたりの最大の関心事について、何らかの情報をもたらすとは期待しないでください。手紙は出してはみましたが、返事はまだ来ていません。ベルギーは海の向こうですし、どこでも人は思うようには動いてくれないものです。メアリ・テイラーは、わたしたちが1月前に出発するのは難しいだろうとっています。アンにもブランウェルにも手紙を書きたいと思い、その積もりでいたのですが、まるで時間がありませんでした。

ジェンキンズさんがブリュッセル領事であるというのはまちがいとわかりました。本当のところは、英国監督教会の牧師さんなのです。

お父さまに頃合を見て手紙を書いていただくのが一番かと思います¹⁾が、今はまだその時期ではありません。機が熟したら、その文面も併せて送ります。デューズベリ・ムアのことは、残念がる

ことはありません。事実上、あなたは含まれていなかったし、実のところアンもそうなのです。ウラー先生には、ふたりのことは最初の半年くらいは伏せておきましょう。

現在の計画ではアンは仲間外れのように見えますが、事が順調に運んだら、やがて彼女にも十分な埋め合せができるものと思います。ぜひ、みんなに希望をもって欲しいのです。わたしはこれが最善の道と信じて疑いません。唯一の不安は、他の人たちが疑問を感じ迷いを持つことなのです。ブリュッセルで半年が終らないうちに、わたしたちはあちらで仕事を見つけなければなりません。わたしの気持ちとしては、1年以内に帰国するつもりはありません。すべてが順調にゆき、わたしたちばかりでなく家の者たちも元気であればということですが。

アッパーウッドを辞めるのは、おそらく12月15日あるいは17日になるでしょう。アンはいつごろ帰れるかといっていますか。あの娘は元気になっているのかしら。こうした一連の展開について、ウィリアム・ウェイトマンさんは何とおっしゃるでしょうか。お父さまと伯母さまはいかがですか。応援してくれていますか。アンはマーサ²⁾とどうやっていくつもりかしら。最近ウェイトマンさんに会うことができましたか。なにか耳にしましたか。みなに愛をこめて。はやくお便りください。さようなら。

C・ブロンテ

わたしは元気にしています。

1) Mr Jenkins 彼の兄(弟)の David Jenkins はデューズベリでパトリックの後任であった。

2) Martha Brown (1828-80) 牧師館の新しい召使い。その父 John Brown はブランウェルの友人だった。マーサはタビーが1836年12月に脚を骨折したときから、下働きをしていた。

[1841年12月9日?]

[ロウドン, アッパーウッド・ハウス]

愛するエレン

あなたがお家にお帰りになっていること、それから、あなたがお病気だったことを、メアリ・テイラーから聞きました——お便りをするのがおっくうでなかったら——病気になる前の気分とその結果を教えてください——心身の疲労が重なったのではないのでしょうか——会いたいです——メアリ・Tは、あなたの様子はいつもと変わりないと言っています。今度は一時的なものであって、ぶり返すことはないと思っています。

お母さまもお病気だったそうですし、マーシーも具合が良くないそうですね——悲しいお家にお帰りですね。わたしは2、3週間のうちにハワースに戻るでしょう——そのときにお会いしたいと思います——こちらがブルックロイドに伺うというのではなくて、あなたがハワースに来てくださるという意味です。愛するエレン、どうかわたしを無理やり招待しないでください——あなたが家を離れられる可能性が現在よりも少なくならないかぎり。あなたの招待にそっちゅううためらっているように見えるのは、実のところ本当に落ちつかない気分です——でも、どんな方法でも現実的と思えるなら、わたしがブルックロイドへ行くよりは、あなたにハワースに来ていただきたいのです。

わたしの計画の進み具合は遅々たるもので、アッパーウッドを辞めてからどこへ行ったものか、

また何をしたものか、まだはっきりしていません——ブリュッセルは依然としてわたしの約束の地ですが、そこに到達するまでには果てしない時間と空間があります——ケーケルベルクへは行けそうにありません——もっと安い施設のことを耳にしました。

今までのところ、お便りをいただく度に——嬉しいですよ——返事を書いてきました。なぜ病気のことを話してくれないのかしら。この手紙は2、3日前に出しているはずでしたが——ちょうど今は、以前にもまして時間が不足しています。この3晩は寝るのが12時か1時というありさまで、一日中、自分の時間は一瞬たりともありませんでした——今日はこれを走り書きしなければ——そうしないと、わたしのことを怠け者と思うでしょう。話したいことが山ほどあるのに、時間がありません——こちらにはもう1、2週間いなければならないと聞かされたところです¹⁾——ホワイト夫妻が家を留守するのです。新しいガヴァネスがわたしのやり方を見に来ました。

さようなら、愛するエレン——親愛なる友へ。

1) けっきょく帰宅はクリスマス・イヴになった。

[1841年12月17日?]

[ロウドン、アッパーウッド・ハウス]

愛するエレン

アッパーウッドをいつ辞めるかまだわかりませんが、辞めたらまっすぐ家に帰るということだけは、はっきりしています——あちこち訪問する前に、自分たちの将来計画について何かしっかりした準備を始めることが絶対に必要です——それをあなたにわかって欲しいのです——すぐにあなたに会うつもりですし、そうしたいと思っていることはわたしも承知しています——あなたはず衝動に駆られて、わたしがあなたのことをなおざりにしていると責めることでしょ——それから考え直して、きっとわたしを赦してくださるものと信じて疑いません——エレン、できればハウスに来てください。無理なら、わたしが少なくとも一日くらいブルックロイドへおじゃまできるように努力してみましよう。でもこれは当てにしないで。ハウスに来てください。ジェンキンスさんの住所¹⁾を教えてくださいありがとうございます——あなたはいつも自分がどんなに具合が悪くて苦しんでいても、他の人たちのことを考えているのですね——どんなにあなたに会いたいか——あなたには分からないでしょう——でもわたしが今ブルックロイドへ行くことにしたら——家の者たちがとてもがっかりするでしょう——クリスマスにはブランウエルに会えると期待しています²⁾。その後ではいつ会えるかわかりません。彼はこれまで5カ月も家を空けていたのですもの。

おやすみ、エレン

C B

ミス・エレン・ナッシー

1) 1841年9月29日付け、エリザベス・ブランウエル宛の手紙を参照。

2) ブランウエルはラデンデンフットの駅長をしていた。

マーシー・ナッシー宛〔1841年〕12月17日

〔ロウドン, アッパーウッド・ハウス〕

愛するマーシーさま

慌ただしくしておりますが時間を見つけて、丁寧なお便りにお礼を申し上げなければなりません。ただちに無条件でご招待をお受けすれば、それが自分の気持ちにもっとも叶っているのですが、今はそこまで自分を甘やかすのは分別のあることとは思えません。アッパーウッドを辞めたら、まっすぐ家に帰らねばなりません。その後、ブルックロイドにちょっとおじゃまする時間があるかどうかは、まだわかりません。それは状況次第です。その代わりにハウスでエレンにお会いしたいのですが。わたしたちの訪問は平等に分かち合われてはいません。彼女の病気のことを聞いて、とても驚きました。彼女のそうした発作が、どうか最初で最後でありますように。エレンはわたしがなおざりにしていると思っているのではないのでしょうか——長い手紙を頻繁に書かないことで——こんな気持ちを彼女が持っていると思うのは、わたしには苦痛です——根拠はまったくありません——彼女の真価を知っていますし、彼女の愛を失いたくないのです——思いつく限りの償いに代えても。お母さまによろしくお伝え下さい。まもなく良くなれるものと信じています。

かしこ

ミス・マーシー

C ブロンテ